

生きることすなわち学ぶこと ―生徒そしてわが子に学ぶ―

西宮市立上ヶ原公民館

藤岡 和代

1. 38年間を振り返って

私は、昨年（平成24年）の春、市立西宮高校を最後に学校現場を離れるまでの38年間、高校教育に携わってまいりました。途中5年間は西宮市教育委員会の指導主事として、高校だけでなく、幼稚園、小学校、中学校の教育にも関わり、多くの教職員や行政職員と知りあう機会がありましたが、高等学校と教育委員会での仕事に共通して言えることは、「教えるよりも沢山のことを学んだ」ということです。つまり、自分が小・中・高等学校そして大学で学んだあと、今度は教師として教える立場になりながらも、実際には学生時代と同じくらいに、時にはそれ以上に、ずっと学び続けてきたように思います。

職場においてだけではありません。結婚して家庭を持ち、教職を続けながら二人の娘を育ててきましたが、私は家庭においても職場の場合と同様に、子を教えて育てるといふよりむしろ、わが子はじめ多くの人たちから色々なことを学び、親として育ててもらってきたような気がします。そしてその学習は、娘たちが社会人となり、私が還暦を過ぎて幼い孫の手を引くようになった今も続いています。

2. 生徒たちに学ぶ

ついこの間まで大学生であった自分が今度は教壇に立って、弟妹のような生徒たちを前にして英語を教える……「高校生といると時の経つのを忘れてとても楽しい毎日でした。」と言いたいのですが、実際には学園ドラマのようにはうまくいわずに頭を抱えることの多い毎日でした。時間をかけて一生懸命に教材研究をして授業に臨んでも、退屈そうに欠伸をしたり私語をする生徒たちがちらほら視界に入り、隣の教室から楽しそうな笑い声が聞こえてくる時などは、生徒の心をつかんで余裕たっぷりに授業をしておられる先輩の先生方が本当に羨ましく思えたものです。テストをしても、自分のクラスの平均点が伸びず、自分が情けなくなって落ち込んだものです。「もっと大きな声でしゃべって下さい。」とか、「授業中、他の先生みたいに、教科書以外のおもしろいことも色々話して下さい。」とか、生徒たちからは色々な注文が出てきます。新米だからといって甘く見られたくないと思う気持ちが顔にも表れていたのでしょうか、廊下を歩いている時に、「先生、もっとにつこりして。」と言われたこともあります。やがて数年のうちに、「先生の声が大きすぎて隣の教室にいても聞こえてくるよ。」とか、「大きな口あけて笑いすぎです。」とか言われるようになるろうとは、その頃は想像もしませんでした。一人教材研究に努めるだけでなく、先輩の先生方の授業を見せてもらったりして、分かる授業、力のつく授業ができるようにと、私は自分なりに一生懸命頑張りましたが、なかなか思うような授業ができずに、悶々とした暗い気持の日々が続きました。

自信喪失気味であった私に色々ことばをかけて、私を教師として育ててくれたのは、ほかならぬ生徒たちでした。何人かの生徒たちが誘い合って、休み時間や放課後に、教科準備室にいる私のところまで質問に来てくれたのです。英語が得意な生徒からの難しい質問は、自分の英語の勉強にもなりましたし、英語が苦手な生徒からの基礎的な内容の質問は、「中学校レベルの英語でつまづいている生徒もいるのだ」ということを直に教えてくれました。教室では一方的に教えるだけの授業になりがちな私でしたが、生徒たちが足を運んで色々な質問をしにきてくれたおかげで、毎日の授業の反省ができ、教師としては最高の勉強ができました。普段の一斉授業で私は、指名しても、「わかりません」と小さい声で答えるか黙り込むかの生徒に対して、何がどのようにわかっていないのかを確かめることもせず、時間ばかり気にして授業を進めていました。それが、個々に質問を受けて生徒の疑問を一つ一つ丁寧に聞

くことによって、次の授業の進め方が少しずつ改善できていったように思います。英語が苦手でも投げ出さないで、一生懸命に辞書を引いて勉強して質問に来てくれた生徒たちは、私にとってとてもありがたい「先生」でした。使用済みのわら半紙の裏に大きな字で英文を書きながら、寺小屋のような勉強会を続けることによって、私は生徒の心と繋がった英語科教育法を学ぶことができたように思います。「そうか、わかりました！」と言って嬉しそうな顔をする生徒たちを見て、「教師になって良かった。」と思えるような日が多くなってきました。教える以上に多くの大切なことを生徒たちから学び、教え子たちから教える喜びをプレゼントしてもらったように思います。

自分もベテランの域に入ったかなと思う頃、私は聴覚障害の男子生徒の授業を担当しました。生まれつき両耳が聞こえず、自然に発声することのできないその生徒は、授業内容が高度で進度も早い理数コース（現在のグローバル・サイエンス科）の生徒でした。陸上競技部で短距離を得意としていましたが、合図のピストルの音は聞こえないので、その煙や他の選手の動きを見てスタートしていたそうです。特殊な訓練をして身に付けた彼の声は人工的な感じで、話す内容がほとんど聞き取れませんでした。根が明るい性格で恥ずかしがらずに喋ろうとしていたので、いつもそばにいる仲のいい友人たちは、彼の話すことの大半を理解できるようになっていました。私が教えたのは3年生の英作文です。最初私は、他の生徒とは差がつくだろうから、放課後の補充指導を個人的にやるつもりでいましたが、彼は、他の生徒にほとんど遅れることなくしっかりと授業内容を理解することができました。授業中私はできるだけ彼の方を向いて、英語も日本語も、大げさなくらいに口の形をはっきりと動かして話すようにしました。彼は常に顔をあげて私の口元をしっかりと見つめて、私の言うことを一生懸命に読み取ろうとしていました。その懸命な顔を思い出すと、今でも胸が熱くなります。彼のノートには毎回、家での予習に3時間以上はかかったであろうと思われる内容の英語が、5～6ページにわたってしっかりと書かれていました。進行に合わせてそのノートの該当の部分を指で押さえながら授業すると、彼は嬉しそうにうなずいてくれました。このようにして彼と他の生徒たちの両方にわかるようにとあの手この手を使いながら全力投入で授業をすると、そのあとしばらくはぐったりするほどでしたが、彼の日々の努力を思うと、こちらが音を上げて手を抜くことなど恥ずかしくてできませんでした。放課後彼は、大好きなクラブ活動を休まずに頑張りたいということだったので特別な補習はしませんでした。成績も良好で、人懐っこく明るい笑顔で元気に高校生活を送って卒業していきました。私は、自分が辛くて弱音を吐きなくなった時、苦労を苦労とも思わずに前向きに学ぶ彼のことを思うと、たいていのことには耐えられる気がしました。彼の授業を担当できたことに感謝しています。努力することの大切さを、そして、明るく強く生きる力を私はこの生徒から学ぶことができました。ある時授業で、「自分の将来」という題の自由英作を宿題に出しました。すると彼は、「頑張って勉強して、できれば大阪大学の理系の学部に入り、宇宙に関係した仕事をしたい。」というようなことを書きました。理数コースの特設科学講座の講師として阪大から来て頂いている畑田先生のことをすぐに頭に浮かんだ私は、お忙しい先生のご都合も考えずに研究室にお電話をし、大阪大学で、聴力障害のある生徒の受け入れが可能かをお聞きしました。先生は、突然のぶしつけな電話にもかかわらず、とても丁寧に対応して下さい、「今まで大阪大学にはそのような学生が入学したことはなかったので、現在特別な態勢は設けていないけれど、今後もし、聴力障害のある学生が入学するようなことがあれば、大学としては全体で連携を図り、安全対策はじめ色々な対応を考えて、その受け入れをしていくことになるだろう。」と言って下さいました。畑田先生のこのような言葉を生徒本人に伝えると、彼はにっこりとうなずいて、それを受験勉強の励みにしていたようです。残念ながら大阪大学には入れませんでした。某公立大学に現役で合格することができました。今ここで、どのような仕事をしているのかが大変気になっています。

かつて亀井勝一郎が、青春期には、愛や死や自己の未来や神の有無など、すぐには答えの出ない難問が浮かんで、そういう問いを発することで精神の核心が形成され、我々は不可解なものに育てられる、というようなことをその「青春論」に書いています。高校生はその青春期の真っ只中にいるのだから、自分探しの旅で迷うことも多く、学校教育の枠に入れない者も当然ながらおります。かつてクラス担任した生徒の中には、集団の中に入ろうとしない生徒や、学校を休みがちであった生徒、また、時には学校を去っていった生徒もいました。自分のわずかな経験と本から仕入れた知識しかない私はそのような生徒を見て、「この生徒はなぜもっと我慢できないのか。」とか、「ただ単に我儘を言っているだけではないのだろうか。」など思うこともありましたが、十分に時間をかけて彼らの言葉に耳を傾けると、少しずつ生徒の心が見えてきました。そして、学校の授業も大切だけど、すぐには答えの出ない問題にじっくり取り組むのも、この生徒にとっては大切な勉強なのだと考えられるようになりました。「しっかり聞く」、そして「ゆっくり待つ」ということの大切さを、私は生徒との触れ合いを通して学ぶことができました。人一倍悩み多き青春時代を送った生徒たちは、その後、どのような人生を歩んでいるのでしょうか。「青春時代が夢なんて 後からほのぼの思うもの 青春時代の真ん中は 道に迷っているばかり・・・」という歌がずっと前に流行りましたが、この歌は、自分自身の青春時代、そして教師になってから多くの生徒たちと共に繰り返して送ったその後の長い青春時代を通して、とても心に響いて大好きな歌の一つです。

このように、高校で関わった多くの生徒たちのお陰で、私は、時には立ち止まったり後退りしながらも学ぶ姿勢を失わず、教師として成長することができたと思います。私にとっては、一人ひとりの生徒たちが、かけがえのない先生でした。

市立西宮高校の卒業式では長年、「仰げば尊し」を式歌として斉唱しています。明るくて澁刺とした調子の校歌に続いて、ゆっくりと静かにこの曲が流れ、「仰げば尊しわが師の恩・・・」と卒業生たちが歌い始めると、式場の在校生も教師も保護者も、感謝と別れの寂しさと巣立ちの喜びが入り混じった思いで一杯になります。大学入試の合否発表前で、生徒は勿論、教師も保護者も落ち着かない気持ちを抱えていながらも、この時ばかりはそれも少し忘れて、式場の心が一つとなります。学年団の先生たちに感謝の花束を渡し、クラスごとに大きな声で「ありがとう」と言って退場していく卒業生を見てると、教師はみな、教え子たちの成長ぶりに胸を熱くして、心からの拍手で見送ります。

3. わが子に学ぶ

私には、6歳違いの2人の娘がいます。性格はかなり違いますが、それでも同じ親から生まれて同じ環境に育ったからでしょうか、興味・関心の方向は似ており、保育園から高校までは勿論、大学までも同じところを卒業しています。また、大学は、母である私も同窓の先輩になります。現在、長女は2児の母親となって育児休業中（間もなく復職予定）で、次女は海外で今も勉強を続けております。この2人の娘の母親として私が経験してきたことに少し触れたいと思います。

長女が2歳の頃、私は、学校の仕事と、育児等の家庭の仕事で心身共にかかなり疲れ、落ち込んだ時期がありましたが、娘を保育園に預けて仕事も休まずに何とかやっていました。そんなある日、保育園の先生から、「〇〇ちゃん、この2週間ほどずっと、お熱はないけど元気がないです。おうちで何かありましたか？」と聞かれました。2週間前といえばちょうど私が調子をくずし始め、ため息の回数が増えてきた頃です。私は幼い長女を思わず抱きしめました。一緒に暮らす母親は、子供にとっては環境そのものであり、母の笑顔が消えると小さな心や体は悲しんで赤信号を出すのだということを、わが子から身をもって教わった気がします。

保育園に通う頃、娘たちは、先生が普段口にされているのだらうと思われることを真似て、自分の言葉のようにして家で話していました。2人の保育園は、キリスト教系の大学の付属保育園でしたので、時には、恐れ多くも「神さま」がその話の中に登場されることもありました。そして、幼子の口から出ることばの中には、私が学ばねばならないようなものもありました。次はその一部です。

私：「毎日毎日雨が降って、ほんとにいやだねえ。」

子：「お花や木が、神さまに、喉が渴いたからお水ちょうだいってお願いしたから、神さまがお空に雨を降らせてくれているんだよ。」

私：「こら！お箸を落としたらだめでしょ。しっかり持って、早くご馳走さませいなさい！」

子：「〇〇子はいい子だけど、おててがまだ、眠たいよーって言ってるよ。」

私：（よく覚えていませんが多分、イライラして子供を叱った時のこと）

子：「お母さん、お心が良くないよ。」

私：（別の用事で忙しくて、子供の顔を見ないで適当に話をした時のこと）

子：「お母さん、ちゃんと私の目を見てお話してちょうだい。」

こんな娘たちが、それぞれ小学1年生、中学1年生の時に、あの阪神大震災が起きました。勤務校が全壊して、我が家は半壊、そして子供たちの通う学校は両方とも避難所として使われるなど、とんでもない生活が突然始まりました。電気はしばらくして復旧しましたが、ガスや水が出ず、余震に怯える不安な日々が続きました。私も夫も仕事を休んで子供たちと一緒にいるわけにはいかなかったので、2人を但馬の実家に預けて、母校の小学校と中学校に疎開させることにしました。故郷の学校は、簡単な面接だけですぐに転入させてくれ、親と離れて暮らす子供たちを温かく受け入れてくれました。長女は霜焼けになりながらも大雪の中を元気に中学校に通い、仲の良い友達もできたようでした。次女は作文の指導を熱心にされる先生に担任して頂いて、毎日その日の出来事や自分の思いをしっかりと絵日記に書いていましたが、そこには、先生の優しい言葉が沢山赤ペンで書かれていました。私は週末に帰省した時にその日記に目を通しましたが、娘の書いた次のような文を読んで胸がいっぱいになりました。「・・・わたしはおとうさんとおかあさんに手がみをかきました。とてもあいたくなって、かいた字がゆれて見えなくなりました・・・」まだまだ親に甘えたい7歳の子供が、両親と離れ、寒い田舎で姉と2人頑張って学校に通っているのだと思うと切なくて、子供たちを残して再び西宮に帰るのが辛かったことを思い出します。一昨年、阪神よりもさらに甚大な被害をもたらした、原発事故という大きな問題をかかえた大震災が東北で起きました。その復興は未だに遅々として進んでいないようです。東北の山河や田畑が再び輝き、人々に安心と明るい笑顔が戻るまで、私達は被災地のことを決して忘れずに、できる限りの支援をしていかねばならないと思います。

中学生、高校生になると、わが子たちも、悩み多き青年期そして反抗期を迎えました。勉強、進路、友人関係、クラブ活動・・・何が原因なのかよくわかりませんが、長女は制服に着替えてもなかなか足が学校に向かず、そのまま家で過ごすことが時々ありました。私はそういう日には、朝作ったお弁当を職場から昼休みに家に持ち帰り、娘と一緒に食べました。「無理して学校に行かなくてもいいから、しんどい時にはゆっくり休みなさい。」といいながらも、心の中では、これから長くこの状態が続いたらどうしたらいいのだらうかと不安でした。同じ高校生でも、予習していなくても平気で登校し、授業中

に叱られても照れ笑いですませている自分の教え子たちが、頼もしく、また、羨ましく思えました。自分が高校生の頃、学校が嫌で休みたく思えることがあっても我慢して登校したのを思い出し、娘にも、「我慢して頑張れ。」と言いたい時もありましたが、そうすれば事態がさらに悪くなるのは目に見えていましたので、そのことばは口にはしませんでした。そして、娘の苦手な数学の教科書を開いて、30年ぶりに三角関数やベクトルなどを一緒に勉強したりしながら、娘の心が暗いトンネルから抜け出るのをじっと待ちました。今いる場所から少し離れてみて、初めて見えるものもあります。時には道草し、慌てずにゆっくりと再出発の時が来るのを焦らずに待つことも大切であることをその時知りました。私はそれまで、寄り道はあまりせずに、もがいてでも何とか進んでいくことが多かったので、わが子とトンネルの出口が見えてくるのを待つという経験は、親としてもまた人間としても、とても勉強になったように思えます。「青春時代の真ん中は 道に迷っているばかり・・・」の歌のように、その後長女は、自分探しの旅をしばらく続けましたが、幸い、いい友達やいい伴侶に巡り合って、とてもいい笑顔とことばで子どもたちに接するいい母親になっています。今は無邪気な幼子たちが、やがていつか青春時代を迎える時にも、娘はきつとうまく子どもたちを見守ることでしょう。

西宮市では、冬になると多くの学校が、武庫川の河川敷でマラソン大会を行います。ある晩、真夜中近くにその練習だと言って、次女がジャージ姿で家を出ました。その当時娘は、急に口数が減って無表情になってきており、こちらがかけることばに返事もしないなど様子がおかしかったので、内心、これは困ったことになったと思いました。こんな遅い時間に走るのは危険だからやめなさい、という決まり切ったことばだけでは娘を制止できず、かといってほっておくわけにもいかず、私は運動靴をはいて後を追いました。途中、娘との会話はほとんど成立しません。朝は多くの人たちが元気にジョギングしたり体操したりして賑わう河川敷ですが、深夜には当然人通りはありません。静まり返った暗い道を走る女子高生とその後を追うおばさん。警官に呼び止められて補導されたらどうしようと思いつながら息を切らせて走っている自分が、情けなくて泣けそうでした。2~3週間こんなことが続きました。学校で何かあったのか、あるいは、親に何か不満をぶつけたかったのか・・・わが子のことが理解できないで過ごす当時の私の心は、筋肉痛の足よりも重く感じられました。「真夜中のハイキング」ならぬ「真夜中のランニング」を母親の護衛付きで行った次女は、生来人一倍好奇心旺盛な性格で、大学卒業後は資金をためて海外に飛び立ち、色々なことにチャレンジしながら青春を謳歌しています。現在はニュージーランドで英語の勉強中ですが、その後は、タイのチュラロンコン大学の大学院で勉強をするのが目下の目標になっています。

亀井勝一郎は前出の「青春論」の中で、「・・・自己の未来、自己の生き方については、いかなる名著にも書いていない。親も師も無力である。自分で一步一步を生きてみなければならぬ。」と書いています。私は、生徒たちにも自分の娘たちにも、「これが青春だ！」と教えられながら、教師として、そして母親として育てられたように思います。

4. 今、公民館で

現在私は、西宮市立上ヶ原公民館で、市民の学習活動のお世話をしています。

西宮市では、1つの中学校区におよそ1館の割合で公民館が設けられており、様々な年齢層の人たちが仲間と共に、文化、芸術、スポーツ（体操、ダンス、ヨガ、太極拳等）などのグループを作って人生を楽しまれています。仲間と一緒に学ぶ人たちはみな、笑顔いっぱいです。幼い子を連れた母親たちのリトミックの会、60歳を越した方たちの社交ダンスのグループ、彫刻や絵画や手芸を楽しみながら腕を磨くグループ、また、家事や介護の合間にミュージカルを練習して、公民館の文化祭などでその成果を

発表されるグループなど、実に様々な方々が活動されています。仲間と共に趣味を楽しんだり、自分を磨いて学ぶ人たちは、年齢に関係なく輝いています。

また、西宮市の24の公民館にはそれぞれ、地域から選ばれた7名の活動推進員がいて、月に2～3講座を企画・運営しています。地域・家庭・人権・子ども・健康・芸術文化・国際などを課題としてバランスよく講座が生まれ、多くの市民が喜んで参加し学習しています。上ヶ原公民館は関西学院大学に近いため、大学の先生を講師に招いて文学や歴史講座を行ったり、サークルの学生によるジャズやコーラスを大学との連携講座として毎年開催しています。また、18年前、周辺地域が阪神大震災で甚大な被害を受けた時、西宮市在住の講談師である旭堂南陵氏が、被災者を励まし、市民に明るい笑いを取り戻そうと呼びかけられて「上ヶ原寄席」がスタートしました。その後この寄席は上ヶ原公民館の名物講座となり、毎年6月と1月の2回、落語家にも加わって頂いて賑やかに開催されています。地域の方たちはこの寄席をとっても楽しみにしておられ、中には、お孫さんに付き添ってもらって毎回欠かさず車椅子で来られる老婦人もいらっしゃいます。遠くまで出かけるのが難しい方たちに、このような楽しくて有意義な機会を提供できるのは、西宮市が、文教住宅都市として長年その歴史を刻んできたためであろうと、一市民として誇りに思っています。

10年前、学校の週5日制が始まった年に、西宮市では土曜日に宮水ジュニアという事業をスタートさせました。上ヶ原公民館では、前期は囲碁、後期は中国人講師による中国武術のカンフーの講座を開催しました。囲碁講座の講師は宮水学園（西宮市独自のシニアカレッジ）の囲碁グループとして腕を磨かれている方たちです。相当お年を召した方も来て下さって、自分の孫よりも若い子どもたちと向かい合い、雑談を交えながら囲碁を教えられる様子は、実に微笑ましく、西宮の学校教育と社会教育のつながりの強さと素晴らしさを感じました。言葉も少なく、表情もあまり豊かとはいえないような方も、子供たちがやってきて一緒に碁を並べ始めるやいなや、生き生きと目を輝かされます。それは、少子高齢化社会で核家族中心の生活ではあまり見られない光景でもありました。

私が高等学校からこちらに来てまもなく1年になります。朝一番に、公民館の玄関に立つと、「今日は、どんな笑顔に会えるかな？」と思ってワクワクします。公民館での生涯学習が、多くの人たちの生きる励みになっていることを感じながら、そして、生きるということは、学ぶことなのだということを改めて感じながら、新しい職場での日々を楽しく新鮮な気持ちで送っています。